
大樹が枯れたその後に……

甲崎 零火

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

大樹が枯れたその後に……

【Nコード】

N7472B

【作者名】

甲崎 零火

【あらすじ】

俺の名前は帳樹^{ちやうじゆ}。去年親友の大樹と琉樹の二人をなくした。大樹は交通事故で。琉樹は、恋人の大樹を失ったショックで眠り続けてしまったのだ。俺は大樹の遺言を守りたくて毎日琉樹のもとを訪れる。そんな日々が一年過ぎたある日、琉樹の弟の琉禍が表れて樹に琉樹の日記を渡し…… / 番外編に「大樹」編追加しました / 最終話、更新いたしました。重ね重ね、今までありがとうございました。

大樹が枯れたその後……

第一話：紅月

呼吸も出来ない様に、蒸し暑く、風も吹かない外と比べ、中は信じられない程涼しい。

通り慣れた白い道。そこを通る人はいない、とは言わないが、殆どいない。

時折すれ違う人は白い服を纏う。そして、どう見たって場違いな俺に何も言わない。

此処に來ると、あらゆる感覚が麻痺する。

……此処は墓所と同じだ。そして自分達の一している事は徒勞に過ぎない。

眠る者呼び覚ます事など、出来やしない。

何時からかそう思う様になった。祈っても、囁いても、泣いてみせてすら、彼女は目覚めなかったから。

けれど俺は此処にひたすら通い続ける。何度でも、何度でも。ただ、約束を果たす為に。

白い部屋に眠る彼女は、綺麗だ。

白い肌。対照的に黒く、緩やかに波打つ長髪。紅をはいたかの様に赤い口唇。長い睫毛。

「今日も来た。いい加減同じ顔ばかりで鬱陶しいか？」

声をかけ、胸で組み合わされた手の甲を撫でた。

耳に刺さる沈黙の音。

置いてある椅子に腰掛け、鞆を適当に放る。

「よくもまあ、長々と飽きずに眠っていられるな。飽きないのを見ている夢のせいかな？」

音の途切れから逃げる様に矢継ぎ早に言葉を吐き出す。

「どんな夢を見てるんだ？まだ奴がいた頃の夢か？それとも奴の事はもう思い出しもしないのか……？」

大樹が枯れたその後……

眼前の彼女はただ安らかな寝息をたてる。

それでも俺は話しかけるのを止めない。

自分の声だけが響くのがどれだけ虚しいとしても、だ。

「もうすぐ夏になる。紅月が好きな季節だろう？休みに入ったら、もつと長く此処にいられる。お前にとってそれが良いかどうかは分からないけどな」

そつと、不健康な程白い彼女の頬を撫でた。自分よりは白く、けれど血の通う肌。

「あ、その前に定期試験があるな。まあ大丈夫。ちゃんと勉強はしているよ。俺より成績が良いのなんか奴位さ.....」

俺はけして、彼の名前を口に出さない。

口に出したなら、持っていかれそうな気がする。

彼の記憶を、胸に燻る感情を。

胸が熱い。失った想い出は時に、俺の心をギリギリ絞る。

ギリギリ、ギリギリ。心臓がきしむ。

慣れた筈なのに。激情を諷める事にも、感情を表に出さない事にも。

「何で、お前の前では泣いてしまふのだろうか.....？」

彼女は、答えない。応えない。

「なあ？最近こんな風に考えるんだ」

目尻から零れる雫が腹立たい。

「俺も、お前の様に夢の中で生きたいって.....」

零れた涙は、彼女の手の甲に落ち、首から下げられたネックレスにも落ちた。

俺はそのネックレスを恨みがましく見つめた。

「お前が羨ましいよ.....俺には何も無い。所詮、浅ましい横恋慕だつたつて事だよな.....」

そのネックレスを、粉々に壊してやりたかった。

けれど俺にはそんな事は出来やしない。

彼が遺して逝った物を壊すなど。奴のいた証しを、薄れさせてし

大樹が枯れたその後に……

まう事など。

「お前は今、幸せ？」

返事はなく、寝息のみ聞こえる。

「お前は今、幸せ？……俺がしている事は、正しい？」

彼女は眠る。表情も変わらない。

「答えてくれよ……」

結局、俺一人が残ってしまった。俺、一人が。

狂おしい程の郷愁を抱えて、何事もなかった様に生きて。

自分に嘘を吐く事ばかりに慣れて、虚しくなつて。

あの時、俺はきつと一度死んだ。

けれど神様は、彼の居た事を嘘にしない為に俺をこの世に留めたんだ。

神様。俺に彼の居ない偽者の世界を見せる、意地悪で限り無く冷たい残酷な神様。

けれど神様は、彼の居た事を嘘にしない為に俺をこの世に留めたんだ。

神様。俺に彼の居ない偽者の世界を見せる、意地悪で限り無く冷たい残酷な神様。

けれど、それが彼の為なら俺は……

「悪いな。……此処に通うのはお前の為じゃあないんだよ……」

彼女は美しい。それに誰にだって優しくかった。

俺とは、違って。

「奴が言ったんだ。『琉樹をよろしく』と言ったから……」

そんな告白にも返事はない。否、静寂という身を焦がす様な痛みと、拒絶はあつたが。

目線を上げ窓を見た。暗い夕陽はただ俺を無言で照らす。

「明日も来る。明後日も。来週も。来月も。来年も。ずっと。お前が目覚めるまで」

もしも。

もしもいつか彼女が目覚める日が来たならば。

そうしたら言おう。

あの三人で過ごした本当に幸せだった日々。

どの一日も忘れる事が恐ろしくて堪らない程に明るかった日々。けれどそんな中で。

俺は暗い気持ちを抱かずには居られなかった。

俺はベッド脇の小さな台に置いてある写真立てを手にとった。

埃のかぶった、俺と彼女と彼と。

満面の笑みでピースをする二人の間で、俺が何とも微妙な表情を浮かべる写真。

幸せで、けれどどうしようもなく腹立たしい。青臭かった俺。

その三人で映る写真を破きたくて堪らなかった。

彼女には分からない。きっと彼にも分からない。

二人は聡明だが、人の悪意を理解出来ない。

だから彼女には言わなければならぬ。

きっと気付く事はないのだろうから。

「俺は、お前を何度も殺そうとした事があるのだ」と。

「今でも、お前を憎まずには居られないのだ」と。

第二話：黄泉平坂

病室を出て、元来た白い道を辿る。
暗く冷たい場所。暗く冷たい墓所。

(……まるで、黄泉平坂)

心の中で、咳く。

世界を創ったという二人の神は夫婦だった。

中睦まじい二人は次々と子を成したが、妻は火の神を産んだ時に死んでしまった。

嘆き悲しんだ夫は、死んだ妻を諦められずに冥界に向かいに行く。だが、やっと冥界に辿り着いてみれば、妻の身体は腐り果て蛆がたかっていた。

余りの恐ろしさに逃げ変える夫。夫に呪いを吐く妻。

その時に通ったのが、あの世とこの世を結ぶという黄泉平坂だ。行きは冥界から愛しい妻を連れ帰る為に、その結果が何よりも彼女を傷つけるのに。

帰りは連れ帰る筈の妻から逃げる為に、浅慮な事をしなければただの悲劇で済んだのに。

以来二人は別々の世界を納める様になったという、陽の当たらない世界と、闇が占める世界……

彼女が夢に落ちてから、もう一年が経つ。

彼女は現実から逃げ、夢を望んだのだと医者には、彼女の父は言った。

俺も全く同じ現実を、同じ様に目の前で経験したというのに。

彼を想っていた感情は、けして負けていないと思う。

なのに。

なのに何故、俺は一人此処に立っているのだろうか……？

病院の外へと出る。もう夕陽は落ち、暗い星ばかりが暗鬱に光る。暗い星、ばかりが。

大樹が枯れたその後……

(今日は、新月か.....)

次に月に出逢うのは、何時だろうか。

家に帰ると、母が出迎える。

「お帰り。.....相変わらず?」

俺は何気ない振りを装う。

「ああ。全く同じ」

母は、些か表情を暗くしながら頷くと、夕飯の支度に戻る。

もう、このやり取りも一年続けた。俺には二人の親友がいた。自分と彼等は所謂幼馴染みで、同時期に産まれた俺達に「樹」という漢字を入れた。樹、琉樹、そして.....大樹。

家は学区が同じになる程度の近さだ。

昔から、本当に昔からずっと一緒だった。

大樹は、その顔立ちの美しさと、素晴らしい頭脳で周りからの尊敬を一重に集めていた。多分、クラス内でも大樹を好きだった女子はニダースはいたはず。

尤も、日本人離れた美貌の琉樹と付き合っている事は周知だったから誰も何も言わなかったが。

.....。

その時、階下から聞こえた夕飯を告げる母の声に、俺は怒鳴るように返した。

大樹。俺は間違っていないよな?これでいいんだよな?

泣きたくなかった。けれど感情を殺す事にも、顔に出さない事にも慣れていた。

見た目には何一つ変わらないまま、俺は部屋を出た。

第三話：絶望と日常の残滓

見渡せば夜道。学校からの帰り道。

紅月の綺麗な日だった。東京の小煩いネオンに星を喰われた、暗闇を失った空に、それは何処か場違いに静かに浮かんでいた。

俺は紅い光の視界の中で「今、この瞬間が夢ならば何でも差し出そう」と思った。

そして今、その過去を夢として繰り返し体験する自嘲。

足下に、広がって来る液体。

紅い、それ。

「大樹！」

隣りで、琉樹が叫び、走り寄る。

何に？

視線をやれば、紅い液体の流れ出した場所に、……大樹のポロポロになった姿が。

「たい、じゅ……」

口が勝手に開いて、彼の名を呼んだ。

夢であると分かっているにも、昔の通りに感情は動き、身体が動く。大樹は、泣きじゃくって彼にしがみつく琉樹の髪を、苦勞して撫でながら、俺に向かって微笑んだ。

俺はふらふらと、その笑顔に惹かれるように、近寄った。

「い、つき……る……を……て」

弱々しく、小さい声で、彼は何かを俺に告げた。

「何だ、何だよ！」

耳を大樹の口許にあて、叫ぶ。

「るきをたすけて……るきをよろしく」

瞳孔が、開いていくのが分かった。

大樹が枯れたその後に……

大樹が枯れたその後.....

「う……うう」

顔に掛かる和かな朝の光に目が覚めた。寝呆けた頭で夢の残滓を追う。

古い記憶。十日に一度位は夢に見るから新鮮味はないに等しい。それでも古傷を抉るには充分だ。はつきりとあの絶望と、自分に對しての嫌悪が浮かぶ。

滝のように落ちる汗を拭った。拭っても拭っても、それは止まらずに流れ続ける。

「た、い、……」

先の言葉は紡げない。俺は琉樹じゃないから。大樹が最期に言ったのは、琉樹を案じる言葉、で。俺の事は、何も言ってはくれなくて。

……琉樹じゃ、ないから……か。

俺と琉樹の違いは、何？

眠る琉樹。きっと今も、夢の中で都合のいい夢を見続けている。

……。

一瞬浮かんだ考えに自嘲する。俺は馬鹿だ。

俺も深い眠りに落ちようか。自分に都合のいい夢を見たい。大樹に愛される夢を……だなんて。

目の前に経つ、嫌味な位に大きい病院。

そしてまた今日も俺は、黄泉平坂を下るのだ。

部屋の中には昨日も今日も変わらぬ姿の琉樹がいるだろう。

大事な親友の、そして憎くて堪らない琉樹が。

二人が付き合い出した時、俺は荒れた。

二人に会いたくなかった。二人に見捨てられたような気がしたから。

置いて行かないでくれと、泣きじゃくる換わりに人を殴った。

血が、灼けてヒリつく爛れた心を、包むように濡らしてくれた。

周りは俺が、琉樹を好きだったと思ったようだった。

それが尚更俺を荒れさせた。

そうだったならどれだけよかつたろう。

そうだったなら、告白してフラれたとしても、区切りをつけられたのに。

そうだったなら、大樹と琉樹が付き合う事を、悔しがりながらも祝福出来たのに。

何で。何で大樹だったのか。

けれどそんな時に。

琉樹の含みのない優しさがどれだけ俺を救ったか。

琉樹の含みのない言動がどれだけ俺を追い詰めたか。

琉樹は知らない。俺がどんな気持ちでいたのか。

琉樹が「大樹に告白しようと思うの……」と言った時、殺してやろうかと思った。

俺は、大樹がけして断らない事を知っていた。

大樹は「俺が琉樹と付き合う事で、三人の関係が変わらないでいられるなら」と俺に言った。

大樹は「三人の友情がいつか誰かの愛情のせいで壊れるなら、俺は友情を愛情にする事を選ぶよ」と俺に言った。

そんな言葉を優しい笑顔で言ってみせる大樹に、俺は「そうだな」としか言えなかった。

好きな相手が目の前で、親友の物になるのを俺は見ていた。そしてずっと見届けた。最期まで。

琉樹。

大樹。

俺は、俺だけが自分の気持ちを二人に言わないままだった。

俺は病室のドアを開いた。笑顔を張り付けて。

琉樹がいる。こちらに背を向けて、琉樹が立っている。

俺の、かつての日常の残滓、が。

第四話：終わりの扉

「る…き？」

振り返った顔は、琉樹じゃなかった。

「樹さん。…まだ来てたんだ」

琉樹の弟の、琉禍だった。

「貴方はまるで番犬みたいだ。…でも仕えているのは、姉さんじゃない」

「…琉禍。お前とは二度と会わないと思ってたよ」

琉禍。琉樹によく懐いていた一つ年下の彼は、琉樹が目覚めなくなつて丁度、一か月経つた日に家まで俺を殴りに来た。

俺に言った。「貴方のせいだ。貴方さえいなければこんだからとな事にはならなかつたんだ」と。

何故そんな風に言われるのかも、だからといって琉禍に殴られる理由も俺には分からなかった。

だが、俺はあの時誰かに責められたかった。

腑甲斐無い自分を、殴つて欲しかった。

助ける事も、支える事も出来なかつた俺は罪人だ。

大樹の死も、琉樹の眠りも、全て俺の罪だ。

慰めばかりを口にする他の誰よりも俺を責める琉禍が、大樹が死んでから初めて、意味ある存在に見えた。

この色も熱も無くなつた世界で、辛うじて琉禍を見ていた。

いや。元から世界に色も熱も着いていなかった。

色が着いていたのは、大樹と琉樹だけ。

俺は二人の見ていた世界を通してしか、世界を見ていなかった。俯いて、物思いに耽っていた俺を、苛立ちのままに琉禍はしばらく俺を殴り続けた。

琉禍の拳から血が出て、真っ赤になっていた。俺はそれを見て、琉禍を止めた。

大樹が枯れたその後に……

大樹が枯れたその後に……

俺は取りあえず、琉禍の掌に包帯を巻いた。俺は口許と身体に痣が出来、唇を切っただけだった。

それなりに体格のいい俺を、小柄な琉禍が殴った所で、対して効果がないのは当然だった。

琉禍は何も言わなかったが、何を言えばいいか分からないだけで、言いたい事は沢山あるようだった。

結局、何も言わなかった。

俺は琉禍を家の近くまで送って、最後に頭を撫でてやった。

琉禍がしていたみたいに。

「僕は迷ってたんだ。ずっと」

琉禍の声が、俺の回想を止めた。

「…何を……？」

琉禍は笑った。ちゃんと食べているのだろうか、一年前より尚更小柄になっている。

「これをどうするか、を」

琉禍は、背中に隠していたらしいものを出した。

「本か……？」

「違うよ。これは姉さんの日記帳……僕は去年、姉さんの部屋でこれを見つけた。しばらくの間鍵が開かなくて困ったよ……」

確かにその日記帳には、やたら分厚い鍵付のベルトのような物がついていた。

「琉樹の、日記帳？」

「そんな物があったのか。」

琉禍は眠っている琉樹の髪を撫でた。

「そっだよ。……大樹さんに貰ったって言ってた……それを覚えてなかったら一生開かなかつたんじゃないかな」

琉禍は琉樹のネックレス　大樹が琉樹にあげたそれを掴んだ。

「これはね。日記帳の鍵でもあるんだ」

ネックレスの石の部分が、ずれた。

中から出て来たのは小さく、古風な鍵。装飾が施され、ネックレス

大樹が枯れたその後に……

スの石と同じ薄紫の石がはめ込まれていた。

琉禍が近寄って来た。訝しく思っていると、彼は鍵と日記帳を差し出した。

「貴方が読むんだよ、樹さん……僕はもう、内容を知っているんだから」

俺は差し出された日記帳を、掴んだ。革張りのそれは手に冷たい。「読んで、悩めばいいよ……そして」

琉禍は、そこで言葉を切った。「そして」とは何なのか。

それきり、お互い何も言わなかった。

ただ琉樹だけが、何ごともなかったかのように眠っていた。

第五話：薄紫の石

俺は琉禍に送って行くと言ったが、彼は笑って首を振った。
変わりに琉禍は言った。

「樹さん……その日記帳はきつと樹さんを苦しめるよ。樹さんは耐えられないかも知れない」

でも、と琉禍は変な顔をした。
陽射しが目に染みたような顔だった。

「でも、貴方は読まなくてはならない。貴方が暮らしていた世界が何だったのか、知らなくては」

「琉禍……」

「知らなくては。少なくとも貴方は今のままじゃいけないよ」

実の弟のような琉禍。琉禍もまた、俺を兄のように慕ってくれていたのか。

「先に行って下さい。僕はもう少し此処にいます」

「分かった……お前ちゃんと飯食ってんのか？」

急に話を変えた俺に琉禍は面食らったような顔をした。

「何ですか？急に……」

「辛いのは分かるが、飯は食えよ。お前まで倒れたらどうすんだ？」

琉禍は微妙な顔をした。琉樹が苦手科目で、かなり残念な成績をとった時とそっくりの顔だ。

諦観と、少しの悲しみと、苦痛の顔。

「じゃあな。読んだら返しに行く」

琉禍の頭を乱暴に撫でて、俺は病室を出た。

扉が閉まる前に、琉禍の声が聞こえた。

「樹さん。僕は姉さんと、同じ気持ちですよ……」

ちらりと見えたその姿は、やはり琉樹そっくりのものだった。

大樹が枯れたその後に……

家に帰って、俺は部屋に籠った。

机の上に琉樹の日記帳を据え、睨む。

帰り道考えてみたのだが、やはり琉樹が日記をつけているなど聞いた事がない。

俺と大樹に対して、隠し事など一度もした事がないのに。

……いや、大樹に日記帳を貰ったのなら、知らなかったのは俺だけか……。

しかし、本当に全く内容の見当がつかない。

琉禍の言い方からすると、けして思春期の女子が書くような内容ではないのだろう。

……今更、あれほど知りたいと思っていた俺と琉樹の違いを知る機会が来るなどと、思ってもみなかった。

この中には琉樹が何を思っで暮らしていたかが、書いてあるのだろう。

俺は絶望に堪え、琉樹は堪え切れず夢に救いを求めた。

それは大樹の存在を、俺より琉樹の方が大きく思っていたという事なのか。

それは大樹を、俺よりも琉樹の方が愛していたかという事なのか。ずっと悩んでいた答えを、俺は手に入れるのか。

カツカツと音がする。見ると、手が震えて机にあたっていた。

俺は今までその事を否定して来た。想い続けた歲月もその熱量も、けして琉樹に負けるような物ではないと。

だがもし……

俺はかぶりを振った。悩んだ所で無意味だ。

俺は震える手を押さえこんで、日記帳の最初を開いた。

そこにはこう書いてあった。

「私はただあの人が好きだけなのです。これ以上ない程にあの人が好きなのです。……他の誰かの者になど、けしてなつて欲しくないのです。例え、その相手が無二の親友なのだとしても」

第六話：琥珀色の世界1（前書き）

初めて前書きを書かせていただきます！ここまで読んで下さってありがとうございます。この話、面白くないですよね……（笑）ですがここまでは前置きで、ここからが本編みたいなものなのだ！と言いつかせて下さい（笑）

この第六話より先は「過去編／琉樹の日記・夢編」となっております。一人称が樹から琉樹に代わり、時間もまだ大樹が生きている頃へと戻りますので、ご注意下さい。

さて、甲崎零火は常に皆さんからのコメントを待っております。数少ないこの文面を読んで下さった貴方様！どうか一言コメントを下さいませんか？しがないへたな物書き志望に、恵みのつもりで。

さて、それではまたお目にかかれる日が来る事を望みつ……甲崎零火でした！

大樹が枯れたその後に……

第六話：琥珀色の世界 1

「私はただあの人が好きだけなのです。これ以上ない程にあの人が好きなのです。……他の誰かの者になど、けしてなつて欲しくないのです。例え、その相手が無二の親友なのだとしても」

そこまで真新しい日記帳に書いて、私は溜め息をつく。

机の上に置いてある鏡には、すこし青褪めた顔色の私が映っている。

それも当然。私は自分のみにくい恋情のために、幼馴染み二人を裏切っているのだから。

私の幼馴染みは、私の自慢だ。

大樹は、その神懸かった美しさの顔が一番に目を引くけれど、本当に凄いのはその性格だ。神懸かった、じゃなくて神様みたいな人だ。「隣人を愛せ」を地でいく人。

大樹みたいな人を好きになるのは、とても大変だと思う。きっと自分の幸福より周囲を優先する人について行くのはすごく大変だ。

樹は、少し冷淡で言葉も少ないけれど、本当は誰よりも周りに気を配っている。そして、どんな事にも愚直といえる程熱心に、真剣に考えている。すごく理想の高い人で、ままならない現実を変えようとしている。

樹みたいな人を好きになるのは、報われないと思う。

私は去年から大樹と付き合っている。

好きだったから、誰かの者になって欲しくなかった。

勝手な言い分かもしれないけど、私を見て欲しかった。どんな感情でもいいから、私が彼を好きなのと同じぐらい激しい感情を向けたい欲しかった。

私の幼馴染みは鈍感で、周囲が向ける感情にまるで気付いていなかったから。

……………。

大樹が枯れたその後……

この日記帳は大樹からもらった物だ。毎年の事だけど、大樹は人に物をあげるとき、相手に今一番必要だと思つた物を渡す。それを相手が望まなくてもだ。

適わないなあ、と思う。やはり大樹は神様だ。次元が違う。

樹は毎年私に何を渡すかで至極苦労している。「若い女に何をあげたらいいかなんて、わからん」と、彼は渋い顔で、私に何が欲しいかを聞く。でも、樹は大樹には言わない。

私は絶対に教えない。日付が近くなつて、あたふたしている樹はすごく可愛いから。

結局、樹は硝子細工のように透明な写真立てをくれた。樹らしい、涼しげな小さな華が一房だけついた物だった。

後で「何故これにしたの」と聞いたら「琉樹は手作りの物が好きだろう」と、言われた。

どうやら悩んだ末に手作りにしたらしい。「見掛けによらず樹は手先が器用だからなあ」と、おっとり和大樹は言っていた。

……回想をやめて、私は眼を閉じた。頭が痛い気がする。日記なんて柄にもない事をしているからかな。

……分かつてる。そんな理由じゃない。

私は日記帳を閉じて鍵をかける。

明日も私は、にぶい二人に会う。もう考えるのはやめよう。この暗い感情を引きずって、不審な表情を見せる訳にはいかない。

私は、騙し続けるって決めたんだから。

……他の誰かの者になど、なつて欲しくない。例え、その相手が無二の親友なのだとしても。

そのためなら、私は。

私は自分の感情ごと、周りを潰せるよ。

ねえ、樹。

第七話：琥珀色の世界2（前書き）

どうもこんにちわ。甲崎零火です。……びっくりするぐらいのお久しぶりさです。三ヶ月ぶりぐらいですか……？私にも分からないほどののです。花の（地獄の？）高校三年生なもので、受験勉強に追い詰められています……頭のてっぺんからつま先まで、まごう事無く言い訳でございます。嘘ではないですが。

私としてもこの話を早く完結させたい！という思いです。でもやはり、ちよつと受かるまでは更新が覚束ないと思います。ご迷惑おかけしますが、見捨てないでくださいまし……本当にごめんなさいです。

ではゆるりとごっごっ

大樹が枯れたその後に……

第七話：琥珀色の世界2

私の髪はこげ茶で、結構な癖毛。ゆるゆる波打ってる。今は、見た感じでは背中ぐらいまでの長さしかないけど、実は引つ張るとお尻ぐらいまである。

この髪は、お祖父ちゃんがハーフだったかららしいけど、早くに亡くなったお祖父ちゃんを、私はほとんど覚えていない。

私の中にお祖父ちゃんは、馬の前に立っている写真（乗馬が趣味だったらしい）に写っている若いお祖父ちゃんだけ。

そういえば、真つ黒でストレートな髪がよかったと、幼稚園の頃に泣いた記憶がある。

私の髪や顔つきは、周りの子と違って。よく、その事をからかわれた。

樹と大樹の初恋の子は幼稚園の女の子で、その子は綺麗なストレートの黒髪で、私とはぜんぜん違った。

樹と大樹が二人して、その子の事を可愛いと言う、その言葉がたまらなく嫌だった……。

今も同じ。樹はきつと日本的な人が好きなんだ。黒髪の人が。

「琉樹」

頭の上から声をかけられる。大樹だ。私の前にある席の、机の上に座っている。

「考え事しながら歩いてると、また転ぶよ？」

大樹は爽やかに、綺麗に笑う。……樹は、斜め前の席に座って眼を細めている。わかりにくいけど、この表情でも樹は笑っている。

「転ばないよ！よく転んでたのは小学校の頃だよ！」

私はドキドキと脈を打つ心臓を隠すように大声を上げる。

「……琉樹。突っ込む所はそこじゃないだろ。今は歩いてない、椅子に座っているのに転ぶわけない、っていう所を突っ込まない」と口元を緩ませながら樹が言った。……え。そんな事、考えもし

大樹が枯れたその後に……

大樹が枯れたその後に……

なかった。

周りを見ると、クラスメイトがくすくすと笑ってる。私の声は大きく、皆に聞こえていたのだろう。きつとその後の、低くて、小さい声でも良く通る樹の声もクラス中に聞こえていたのだろう。

お腹を抱えて樹が笑っている。ぐぬ。

「琉樹の声が大きいのは、合唱部だから当然の事だろ。気にするな」慌てて樹は、私が大樹に向けている殺意のこもった視線をそらさせようとす。……ふん。美しい、ユウジョウ、ですこと。

「ふふ。ごめんね。琉樹」

大樹はにこにこ笑いながら謝ってくる。

でも、私は分かっている。大樹が私をからかったのは、暗い顔して考え事していた私を、心配したから。

そういう事に真つ先に気づいて、そして相手に気づかれないように心配りをしているのだ。やっぱり神様みたいだ。心を覗かれてる気さえする。

「琉樹……」

それでも私が殺意のこもった視線を向けたまましていると、樹が飼主の喧嘩を、困った様子で眺めている犬のような眼で見してきた。何故、私が大樹にこんな視線を向けているのか、樹は知らない。誤解してる。

大樹も知らない。この神様みたいな大樹も、私の考えている事全てを見透かせるわけじゃない。

私は大きく息を吐いた。唇を尖らせる。

「大樹は何でも私の事見透かしちゃうんだから！」

まだ大丈夫。

「しかも甘やかすし！」

「だけど、時間の問題。貴方はきつと気づく。」

「樹も私には甘いし！」

私が本当に願っている事を貴方には叶えられない、って事に。

「お前ね……」

大樹が枯れたその後に……

樹が苦笑する。樹も、大樹が私をからかった理由に気づいている。樹もおそらく、私が暗い顔していた事にも気づいていた。でも、何も言わないで黙って見守ってたんだ。

樹と大樹の優しさは、ベクトルが違うだけ。中身は二人とも一緒だから、この二人は惹きあうんだ。

「いいじゃないか。可愛がられてるんだから」

樹がぼすぼすと、私の頭を撫でるように叩いた。

樹は私をなだめる時、いつもこうやって頭を叩く。……黒くて真っ直ぐな髪がほしい、と泣いた幼稚園児の私をなだめた時から、ずっと。

あの時、樹は「琉樹の髪、触り心地がいい。このままの方がいい」と言った。

嘘でもいいから「琉樹の髪、好きだ」と言ってくれればいいのに。

「……イヤネ。琉樹は俺の彼女ヨ」

大樹がおどけた言葉を口にした。樹は慌てて手を離す。温もりのなくなった頭に、寂しさを感じる。それでも私は嬉しかった。

大樹の言葉はおどけてはいたけど、声は硬かった。その中には、ありありと不満と嫉妬が見て取れた。

大樹は何もない床を見ていた。長い睫毛に隠れ、感情を見せない瞳。

そして、気づかれぬように覗き見た、樹の眼の中には暗い嫉妬の炎が見えた。

二人の親友が暗い感情を身にまとっている間、私は本当に幸福だった。

私はただあの人が好きだけなのです。これ以上ない程にあの人が好きなのです。……けして叶わぬ恋情だから、貴方が私に向けてくれる感情はもう、どんなものでもいい。ただ、一時でも長く私の事を考えていて。ほんの少しでも、貴方が想い人を請う時間が少なくなればいい。

大樹が枯れたその後に.....

この恋情が私を壊す前に。どうか、私の恋に気づいて。
。

第八話：琥珀色の世界3（前書き）

来場人数1000人記念です。……といっても99人で止まってしまったので自分で無理やり100人にしましたが。それが何か？（自棄）

……冗談です。見捨てないで（泣）
これにあわせて「番外編：大樹が枯れたその後に……」を解説しました。

こちらの来場人数が切りよくなった所で、登場人物の名前のついた話載る、予定。

誰の話がいいか、リクエストしていただければそちらにあわせて書くかもしれません。今のところ評価もまったくないので、おそらくこれからもないんじゃないかと思っています。ですからこのリクエスト企画もないでしょうね（自棄）

まあそんな事はともかく、そんな感じで琉樹ちゃんがやっと上手く動いてくれます。そろそろ話が進むかもしれない……でもそれは琉樹ちゃんの機嫌しだいでしょう。振り回されています……。

ではではごゆるりとどうぞ。甲崎零火でした。

第八話：琥珀色の世界3

私はその事に気づいたのは、3年も前の事だった。

最初はどう接すればよいのか分からなかったけれど、いつもと変わらない日々を過ごす内に、悩む自分が馬鹿だと思つうようになった。私が彼の気持ちに気づいたところで、今まで私たちが過ごしてきた日々が変わる訳じゃない。本当に、そう思っていたのに。

私たちが過ごしてきた時間を終わりにしたのは私。

この、おまま事みたいなの、それでも必死に守ってきた、優しく温かい空気に耐えられなくなったのは、私。

全部、私が悪かったのに。

なのに何でだろう。

何で、私に不幸は訪れてくれなかったのだろうか。

私は、焦っていた。

必死に足を動かしながら、腕時計を見る。

あと、15秒。間に合うか？

いや、間に合わなければ破滅だ。場合によっては今までの努力が無駄になる。

すると、前方に見知った背中が見える。

よかった！むこうも遅かったのだ！

私は音を立てずに、その背中の中まで走り寄り、気づかれていない。

そこで深呼吸をして、額の汗をぬぐう。走って乱れた髪も直す。

大樹が枯れたその後に……

大樹が枯れたその後.....

私は目の前を歩く背中を追い抜かしながら、振り返ってにっこりと笑った。

「おはようございます。先生」

相手の返事もろくに聞かないまま、私は早足で立ち去った。

皆勤賞、死守。

私はそう心の中で呟いて、教室までの残りの直線を軽やかに踏み出した。

「おはよう！樹、大樹」

私は教室の中に入って、幼馴染二人に声をかけた。

「..... ああ」「おはよう、琉樹」

ぼんやりと顔を上げる樹と、満面の笑み（私には狐に見える）の大樹。

「女子は朝練ないのか？」

ぼうつ、とした顔で樹が私の顔を見る。.....ん。前髪伸ばしてんのかな？

「そうよ。明日はあるけど」

言いながら、樹の前髪をすくい上げた。樹の眼をまっすぐに見ると、眠いのかまぶたが半分落ちてる。

「邪魔じゃないの？この前髪」

「..... あんまり人に見え見られたくない」

「何それ。初めて聞くけど」

大樹が怪しいものを見るように眉を寄せる。

「..... お前らは平気」

視線を私から大樹へと樹は移した。

間近に見る樹の瞳。大樹を見てる樹の瞳。.....こんなバレバレな眼を、してるのに。

「でも、一々、人に何か言われるのは、嫌い」

鈍感。泣きたくなってきた。

「樹は眼に感情が出るからね。でも、感情の強さだけが表面に出て

るから、初対面の人は睨まれてるかのように感じるんだろうね.....」
大樹が苦笑した。まるで「自分は樹が何考えてるか分かってる」
って言ってるみたいだ。実際そのつもりなんだろうけど、私も樹も
これには何も言えない。

ちなみに先生は、私が教室に入っただけに入ってきた。それでも
私たちは席の近さを生かして、朝のHRを聞いていない。どうせ大
した事など話していないし、自分で注意していれば言われるまでも
ない内容ばかりだ。

向こうも何も言わない。大樹と私は個人的に話さなきゃいけない
ような時は、先生に愛想よくしてるし、樹は黙ってなくても聞いて
ないから、言っても無意味。

というより、テストではいつも学年順位を1位大樹、2位樹、3
位私、という成績で保っている私たちに下手な事を言っただけられ
たくない、このままいい大学に入学して学校の実績でも作ってくれ
たら何にも言わない、という態度が透けて見える。

「そういえば、今日はギリギリだったね。皆勤賞・死守」
素知らぬ顔で大樹は話題を変えた。

「二人が迎えに来てくれないと、起きられないの」
男子は今日、体育祭に向けての朝連があつた。だから普段は一緒
に登校しているのに、今日は一人だったのだ。

一人の時は、学校になんか行きたくないと思って朝が憂鬱になる。
.....二人の事は好きだけど、二人といる時間は好きだけど、二人と
いたいけど、でもそれは私の心を汚くさせる。本当はこんな事思
いたくないし、醜いって分かってるけど、私は.....
でも、学校に行けば樹と大樹に会えると思うと、走って向かって
しまう。

絶対に、そんな事は言わないけど。

「何で皆勤賞？」

樹が、信じられない、と言わんばかりの眼で問う。

「.....樹はすぐに授業サボってフラフラするからなあ。皆勤賞なん

大樹が枯れたその後に……

「絶対に無理だよな」

大樹はそう言って、苦笑した。

「だって、同じ学費払ってるのに、皆勤賞の人だけ商品がもらえるなんて、不公平じゃない！もらいたいじゃない！」

私はわざと声を少し張り上げた。……あ、先生が迷惑そうな顔してる。にっこり微笑みかけて『何か御用ですか？』みたいな顔をしておく。先生は何も言わずに眼を背けたけど、険のある表情はしてないからOK。

樹は眠そうな目をちよつと見開いた。……なんだかうたた寝してた猫が物音に反応したみたいだ。

「ありえない……」

だって、嘘だもの。

本当の事なんて言いません。

「……………」

大樹が不思議そうに私の顔を見ている。しかも何も言ってこない。……時々、大樹はこういう事をする。やたら綺麗な顔で、しかも輝くような瞳で見られるから、タチ悪い。

「……な、何？大樹」

「ん〜……本当？それ」

嘘だよ。

やっぱり、大樹には私の嘘が分かるんだね。

さすが、私のコイビト・大樹。

でも、ごめんね。貴方じゃないの。

大樹の事は確かに好きだけれど、それは違うの。

「やだ、本当だよ？そんな訳わかんない嘘つかないよごめんね。いっぱい嘘ついてるよ。」

二人にだけは、嘘なんかつきたくなかったのにね。

他の誰よりも、二人の事が一番大事なのにね。

なんで、私が一番嘘ついてるのは二人なのかな？

「そう？」

大樹が枯れたその後に……

大樹はそれだけ言って、それ以上は何も言わない。

大樹。貴方が大好きだけど、大嫌いだよ。そんな風に、私には出来ないような鮮やかな引き際。

嫉妬するよ。

「……大樹。琉樹が俺たちに嘘なんかつく理由がないだろ。しかも皆勤賞なんかの事で」

樹がちよつと怒ったみたいに言う。

樹。貴方が大好きだけど、大嫌いよ。そんな風に、自分が中心にいる事にすら気づかないで、馬鹿な樹。

好き。

大好きだよ、樹。

鈍感な樹。

私と大樹を信じきってる樹。私が、大樹と付き合う事に荒れた樹。その事で「樹は私を好きだったんだ」という残酷な噂が流れて、それなのに、ただ黙って下唇を噛んでやり過ごしていた樹。……男なのに大樹が好きな樹。私を好きになってくれない樹。

私は樹が好き。

……他の誰かの者になど、なつて欲しくない。

例えその相手が大樹、貴方なのだとしても。

私の無二の親友で、……叶わなかった、かつての初恋の人なのだとしても。

皮肉ね。この場合、私の初恋は叶ったのかな。

「そつよ大樹。そんな嘘つきません」

樹が私を好きになってくれない事など、とつくに分かってる。樹は、それほどまでに大樹が好きな事に、私は気づいてる。

でも、私の醜い心は納得してくれない。

叶わぬ恋情だから、貴方が私に向けてくれる感情はもう、どんなものでもいい。

ただ、一時でも長く私の事を考えていて。ほんの少しでも、貴方が大樹を請う時間が少なくなればいい。

大樹が枯れたその後に……

そう思っ、私は大樹に告白した。大樹が私の告白を断れないのは分かってたから。

「そうだね……」

そうやって、貴方は綺麗に笑うのね。全部見透かしたみたいな眼神様みたいな大樹。

その心の優しさを見てると、私は胸が痛くなるの。もっと、貴方はわがまま言っ、いいのに、それに見合うだけのものを貴方は持つてるの、って思う。

知ってるのよ。

私、貴方が樹を好きな事、知ってるの。

私が告白した時には、もう貴方は樹が好きだった。3年前に、私は貴方が樹を好きな事を知った。

その時は、見守ってよう、って思ったのにも、気づいたの。

大樹は、樹に告白する気なんてない事に。

私が樹を好きな事に。

去年「何で告白しないの」って、私が問い詰めたら「男同士だから」って、貴方は言ったね。……それは、樹が貴方を好きだって知ってても同じ事を言ったの？

私が「なら、代わりでもいいから私と付き合っ、って言ったら驚いてたね。「考えさせて」って言っただけ、貴方が断らない事、私には分かってたよ。

……貴方も怖がったもの。私が樹と付き合っ事。

貴方は樹の視線を誤解した。樹の恋情は、ずっと貴方に向いたのに。

なのに、気づかないで……。

「お。授業始めるぞ」

1時間目の先生が来た。私は、担任の先生が出て行っ事にも、無意識のまま樹と大樹と会話をしていた事にも気づかなかった。

ああ、レンアイには鈍感な私の親友たち。

大樹が枯れたその後に……

私だけが、全部気づいて、利用してる。
樹、私は貴方が思うほど、綺麗な人間じゃないの。
大樹、私は貴方のその眼でも覗き込めない奥深くでは、本当に醜い人間なの。

ごめんね。でも、本当に二人とも、大好きよ。
憎まれたいくらいに。
憎みたいくらいに。

ねえ。私が皆勤賞を狙ってる、否、毎日休まず学校に来る本当の理由はね。

私がない所で樹と大樹が会話をする事で、二人がお互いの誤解に気づいてしまうかも知れないから。
皆勤賞なんて言うてるのは、私がどれだけ体調悪くても学校に来る事を誤魔化すため。

怖い。私が嘘と二人の誤解で作り上げた「今」が壊れるのが。
少しでも綻びたら、終わり。きつと察しのいい二人は、きつかけさえあればすぐに互いの気持ちに気づく。

私が作った「今」は夢みたいなものなの。
私はこの夢が消えないように、必死で綻びを潰してまわってるの。
この夢が、覚めないように。

第九話：琥珀色の世界4（前書き）

お久し振りですな〜甲崎零火です。個人的にはやっと終わった灰色の日々でした。

これからはちゃんと定期的に連載しますよ！赤文字（更新されてません、っていう表示）も点灯させません！

そういうわけで第九話です。これからはちよくちよく前の話の方を改稿する予定です。なにせこの話中学二年ぐらいに二話ぐらいまで書いて、放置していたのを見つけて書き足してるシロモノなので、日本語が変です。特に番外編！読みづらい！

さてさて、この話を読むのが（私のせいで）お久しぶりな読者様かもし一人でもいたら光栄の限りです。誰かお一人でも私の灰色な日々の間、連載再開を待っていただけのなら、それだけでこんな時間更新した事を喜べます。もちろん、新規読者様も嬉しいのですよ？言葉も物語も多くの人に読まれるためにあるのですから。それではこのへんで。甲崎零火でした。

第九話：琥珀色の世界4

「あ、ほら。今日は随分と紅い」

文化祭前夜。準備に追われて、いつもより帰りが遅くなった。

周りはまだ暗くて、紅く光る車のライトが映える。

何故、車のライトは紅なんだろう。不吉な感じがする、この暗い紅。

この色を見ると、理科の教科書に載ってた、血液を含まない「新鮮じゃない血」を連想する。

そんな物思いにふけている時、大樹の声で夜空を見れば、満月から裂け逝く月があった。

紅い血に塗れたような、それ。

私の隣で樹もまた、ぼんやりと月を見ていた。

……樹が、この先も私の隣にいてくれるなら。

大樹を愛しく思う時間よりも長く強く、私を憎んでくれるなら。

私はどんな嘘でも吐く。貴方を傷つけ続ける。

ほら、あの月も私達の心と同じように血塗れ。

私か吐いた嘘で血塗れ。

……紅月の、綺麗な夜だった。

時々。

本当に時々だけど、樹と二人きりでいる夢を見る。

私は白い部屋の中でひたすら眠っていて。

大樹が枯れたその後に……

大樹が枯れたその後に……

樹が私にひたすら話しかけてる。内容は聞き取れない。聞こえてるのに分らない。

私は何だか寂しい。

何でかな。大樹がいなかったかな。あんなに樹と二人になりたかったのに。

そうだ。大樹はどうしていないのかな。

体が動かないし、口も開かないから樹に聞く事も出来ないけど。

……それに、樹ともう少し二人でいたいから。聞けない。

ぼんやりと、聞き取れない言葉を喋る樹を見つめる。

何喋ってるの？

何で大樹はいないの？

何でここにいるの？

ねえ、樹。

何で泣いてるの……？

あ、何だか眠くなってきた。いや、今も寝てるはずなんだけど。

意識が遠くなる。樹が見えなくなる。

代わりに、樹の声が聞こえてくる。

「は……………いよ」

何て言ってるの……？

暗闇の中で、眼を開く。

この夢は、何も不自然なところなどないのに、何も怖いところなどないのに、私を気持ち悪くさせる。あの不気味に白い部屋と、いつもとは違って饒舌な樹。

大樹が枯れたその後に……

動かない自分の体。

私は暗闇の中で、自分の体を抱きしめた。

冷え切った手足。でも、ちゃんと動く。

自分の体なのだから、当然なのだけど。

すっかり眼が覚めてしまった私は、起き上がって電気をつける。

そして気を取り直そうと、机の前の椅子に座ってペンをとり。

そこで動きが止まってしまふ。

今、何をしようとしたのだろうか？

何で私はペンなんか持ったんだろう？

宿題は寝る前に終わらせているし、何でペン？

私は自分の行動に首をかしげながら、ペンを置いた。

何か暖かいものでも飲もうか。ココアでも飲めばまた眠くなるか

もしれない。

眠くなくても、寝なくては体が持たないだろう。

何せ明日は……明日は、運動会なのだから。

第十話：琥珀色の世界5

「樹ー！頑張つてー！」

足の速い樹は、今回もリレー選手に選ばれていた。

周りからも、すごい歓声と罵声が響き渡っている。

本人が積極的に参加することはまずないのだけど、いつも気づくと参加して、活躍してる樹。

この前も、四人抜きをして……

グラウンドの向こう側で走り抜ける樹は、一人、また一人と追いついていく。

何となく、既視感^{デジャブ}だ。樹がリレーで人を抜かす光景はもう見慣れているからだろうか？。

結局、樹は二位でゴールを潜り抜けた。それでも圧倒的な速さだった。

競技が終わってふらふらと樹が戻ってくる。

「お疲れ様〜」

大樹がのんびりと声をかけて、タオルを差し出した。

「負けた……」

顔には出ていないが、負けたことは悔しがっている。

「でも凄いじゃない！ピリに近かったのに二位だよ！」

「そうだよ。四人抜きなんて凄いじゃないか」

樹は困ったように眉根を寄せた。

「あれ、今回も四人抜きだったの？去年もそうだったよね？」

「去年は、三位から一位で二人抜きだったよ？」

大樹がゆったりと笑いながらそう言う。

「そうだったっけ？確かに四人抜きを、さっきと同じようにしていたと思っただのに……」

「最近、こういうの多いな。よく言う、予知夢とかいうやつでも、見てるのかな。」

大樹が枯れたその後に……

大樹が枯れたその後に……

靈感とか、全くないんだけどな……

「どうした？琉樹？」

樹が不審そうに私の顔を覗いていた。

「ううん。何でもない」

にっこりと笑って見せる。私の心労の大部分は、まごうことなく
コイツが原因だろう。

好きでやっているといえればそれまでなのだけど……

私のこと、憎んでいるくせに、こんな風に心配してしまう甘い樹。

私のこと、憎みきれない可哀想な樹。

ああ、そんなままではこの先きつと大変だわ。

貴方、一人になっても生きていけるのかしら……？

何故そんな風に考えたのかは分からない。

私達はずっとこのまま、三人のままにいると思っているのに。

それでも、一人で生きる、樹の将来が心配だった。

第十一話：琥珀色の世界、終章

そして、世界は廻る。廻る。

私は繰り返す既視感デジャブを、……世界を見ないフリする。気づかないフリをする。

私は夢の中で眠る度に、自分が夢を繰り返し見ている事に気づく。そしてまた夢の中で目覚める度にそれを忘れる。

それでも再び来る、世界の終わりで視るのはいつも貴方。最も愛しくて、最も憎い貴方。

貴方は何て言っているの？

そう思いながらも、私は何処かで気づいている。

貴方の声が、世界を繰り返す度に鮮明になっている事に。

私は聞こえないフリをする。

その言葉に、予想がついているから。

あんなにも願っていないながら、聴きたくなかった言葉だから。

「……は今……前が……く……堪ら……いよ」

大樹が枯れたその後に……

段々と夢が鮮明になっていく。聞こえなかった樹の声が聞こえてくる。

私は聞こえなかった樹の言葉に安堵し、次に巡る世界の終わりで、

大樹が枯れたその後に……

樹の言葉が聞こえてしまう可能性に怯える。

もう分かっている。もうあの偽りだらけの天国で地獄な日々は終わってしまった。

大樹はもういない。もう何処にもいない。

私は現実から目をそらした。樹は逃げなかった。

愛しい樹。でも、貴方に本当の事を知られてしまうよりも、大樹に私の偽りを知られる事の方が本当は、ずっと怖かったの。

大樹は神様みたいに優しく美しかったから。その美しさの前に、私の醜さを曝け出すのは何よりも怖かった。

「俺は今……前が……なくて……ないよ」

世界が廻る。廻る。

そしてまた、この記憶に辿り着く。

「あ、ほら。今日は随分と紅い」

文化祭前夜。準備に追われて、いつもより帰りが遅くなった。周りはもう暗くて、紅く光る車のライトが映える。

大樹が枯れたその後に……

何故、車のライトは紅なんだろう。不吉な感じがする、この暗い紅。

この色を見ると、理科の教科書に載ってた、血液を含まない「新鮮じゃない血」を連想する。

そんな物思いにふけっている時、大樹の声で夜空を見れば、満月から裂け逝く月があった。

紅い血に塗れたような、それ。

私の隣で樹もまた、ぼんやりと月を見ていた。

……樹が、この先も私の隣にいてくれるなら。

大樹を愛しく思う時間よりも長く強く、私を憎んでくれるなら。

私はどんな嘘でも吐く。貴方を傷つけ続ける。

ほら、あの月も私達の心と同じように血塗れ。

私が吐いた嘘で血塗れ。

……紅月の、綺麗な夜だった。

「しかし随分時間かったねー」

大樹がわざとらしく溜息を吐いた。

「……大樹は仕事引き受け過ぎ」

ぼそぼそと樹が返す。

今日は文化祭前日で、ひたすら朝から準備をした。

「?そんなに引き受けてないよ」

「大樹は引き受けてるんじゃないよ、自分で増やしてるから質が悪いのよ……」

こう見えて、生徒会長なんてやってる大樹は日頃からよく雑用に追われている。

ちなみに樹は副会長で、私は会計だ。領収書なしでは予算から支払わない鬼会計として知られている。

でもそれも明日の文化祭で終わりだ。私達の学校では、文化祭三日目の後夜祭で、生徒会の引継ぎが行われる。

忙しかったが、幸福な日々。

大樹が枯れたその後に……

文化祭が終わったたら、私達も否応なしに来年の高校受験に備えなくてはならない。

私達は志望校が同じだ。都内でもトップクラスの高校。失敗したら離れ離れ。

この三人の中では、一番危ないのは私だろう。

私だけ落ちたら。

樹と大樹だけが同じ高校に行ったら。

そんな想像をしてしまう。

「ねえ、琉樹……」

前を歩いていた大樹が、振り返って私に声をかけた。暗さと、大樹の後ろから射してくる明かりで表情が見えない。

「今日、ちよつとこの後話があるんだけど……」

「何？あらたまつて……」

私の隣を歩いていた樹が、物言いたげな顔をする。

樹が言いたいのは、自分の目の前では出来ない話とは、何か、という事だろう。

「うん。ちよつと、ね……」

その時、派手な音がした。

ちよつと隣を走っていたトラックが、急ブレーキをかけた。

何でかなんて知らない。そのトラックに後続の車がぶつかる。ぶつかる。

トラックに積んであった、何だか良く分からない重そうな鉄の柱が、私達めがけて落ちてきた。

一番最初に反応したのは、樹だった。

樹は大樹と私めがけて、咄嗟にタックルをした。

私はそれで鉄の直撃から逃れた。

でも、それでは樹は転んで鉄の下敷きだ。

慌てて顔を上げると、私の前に樹が飛んできた

大樹はぶつかってきた樹を捕まえて、思いつき私の方に向かっ

て投げたのだ。

大樹は、目の前で、鉄の下敷きになっていた。

足下に、広がって来る液体。

紅い、それ。

「大樹！」

私は叫び、走り寄る。

大樹は笑っていた。明らかに右腕と右脚が鉄の柱の下敷きになっている。

大樹が何か言おうとした。聞こえない。

「何？何て言ってるの？」

私は大樹の口元に耳を当てる。

「琉樹……もういい……嘘はもういい……分かってる。分かってるから」

私は自分の目が見開いていくのを感じた。

大樹は何を言っているの？

「琉樹が好きなのは……樹でしょ？……全部、知ってる……」

うそは、もういらぬ。いつきに、すぎだつて、いつてよ？

大樹は吐息のような声でそう呟く。

おれは、おうえんする。こんな、うそつくほど、にくまれることをのぞむほど、るきはいつきがすきなんでしょ？

私は信じられなかった。こんな自分の血の池の中で、何故、大樹は私にこんな事を言うのか。

こんな神様みたいな笑顔で。

普段と何も変わらないような目で。恨み言も、苦痛も口にせず。でも、でも樹は大樹が好きで、大樹は樹が好きだから……」

おれは、いつきがすき。でも、るきもだいすき。そう言つて大樹は笑う。動くわけない腕を上げて、私の頭を撫でる。

ねえ、くるわないで、るき。しあわせになつて。いつきをしあわ

せにしてあげて。

おれは、さんにんのかんけいが、こわれるのがこわかった。こわさないですむなら、るきのうそにつきあうのもよかった。

でも、それでも、おれたちのかんけいが、こわれるなら、おれはいつきを、しあわせにしたい。るきを、しあわせにしたい。

そこで、ふらふらと、樹が近寄ってきた。

私には分かった。大樹の笑顔が、樹に向けるためだけの、愛おしくて堪らない者を見るものに変わるのを。

それは樹が大樹を見ていない時にのみ、大樹が樹に向ける視線だった。

大樹はずっと我慢していたのだ。隠し続けていたのだ。

自分の恋情を樹に気づかれぬようにする為に、その視線を隠していたのだ。

本当はもう喋る力もないのに、最期に残った命の灯火を燃やして、

大樹は言葉を発した

「い、つき……るきをたすけて」

大樹はきつと言いたくて堪らないだろう、自らの恋情を伝える事はしなかった。

「るきをたすけて……るきをよろしく」

この人は、神様だろうか。

その大樹の言葉を誤解したであろう樹は、私の目の前で驚愕と憤怒と絶望に瞳孔を開いていた……

最後の記憶が途切れた。

また白い部屋。

また貴方の言葉が鮮明になる。

大樹が枯れたその後に……

私は耳を塞ごうとする。
それでも身体は動かない。
この牢獄のような白い部屋の中で、私の受ける罰は貴方の声を聞き続ける事。

これは、単なる現実だ。

贖罪のない代わりに慈悲もない、そんな現実。

「俺は今でもお前が憎くて堪らないよ」

第十一話：琥珀色の世界、終章（後書き）

お久しぶりです。甲崎零火です。

今回でやっと過去編が終了です。……挿入のはずの過去編の方が、長いのは……何故だろう。

次回からまた、樹君視点の本編に戻ります。

もうすぐ（予定では後4話位、のはず）で話が終わります。

結末は決まっておりますので、また日もそれほど経たずにお送りできると思います。

どうか、最後までお付き合い下さい。

次は、番外編に「大樹編」を載せる、予定です。

載せられると、いいなあ……（苦）

では、また近い内にお目にかかりましょう、甲崎零火でした。

大樹が枯れたその後に……

第十二話：岐路

私は勘違いしていた。大樹は樹が自分を好きなことも、私が樹を好きなことも気づいていたのだ。

それでも、あの人は笑っていたのだ。何も知らないみたいなお顔を
して。

私はそのことに、大樹の葬式に出るまで気づかなかった。

三人で取った写真の、大樹の部分だけが拡大されて切り取られて
いる、遺影を見て私は初めて気がついたのだ。

その微笑が、諦念と慈愛に彩られていたものであることに。

何て人だろう。こんな人に、私は……

私は思う。

大樹は神様だ。

間違えて人間に生まれ来てしまった神様。

私は神様を苦しめ続けていたのだ。

大樹。ああ。神様。

この悔恨と懺悔の念の中で生きるのなら。

私は貴方の下に行きたい。

でも、私は死ぬことなど望めない。

死んだ先にいる大樹はどんな顔をしているだろうか。

おそらく、大樹はやはり私を責めないだろう。

貴方がけして私を責めないのなら、私は死なないことで地獄を味

わうのしかないのだろう。

私の罪を、誰かが絶つまで……

琉樹の日記はそこで終わっていた。

日記の最後の方に行くにつれて、繰り返し見る大樹が生きていた頃の夢の話ばかりが増え、琉樹の文字や文は荒れ、精神的に追い詰められていく過程がよく分かった。

それは、読んでいた俺も同じだった。

そこに書かれていたのは、俺が何一つ知らなかった事実。知ろうとしなかった事実だ。

いつも丁寧に字を書く琉樹の、乱れ、震える字が眼に入る。

俺は自分の部屋で、思わず琉樹の日記を壁に投げつけた。

音を立てて床に落ちる日記帳。ページがめくられて、日記が途切れ、たずつと後のページが開けた。

本来何も書いていないはずのそのページには。

「たすけて、かみさま」

とだけ書かれていた。

ああ、大樹。琉樹。

俺は自分の心が予想外にも、動揺し、苛立ちながらも頭の片隅で平安を保っている事に驚きを感じた。

これは衝撃の大きさのせいなのだろうか。

いや、違う。

俺は心のどこかで、きつと分かっていたのだ。

琉樹が、何も知らない純心な幼馴染などではない事を。

認めたくなかったただけだ。俺の隣で美しく成長していく彼女が、何かに汚れてしまう事を。

その原因が、俺である事など。

何も知らない無垢な可愛い琉樹。

親友の死にショックを受けて、倒れてしまった哀れで弱い琉樹。

……大樹に託された憎い琉樹。

俺はお前を守ってやらなくては。

俺がお前を守ってやらなくては。

大樹が枯れたその後.....

愛しい。憎い。

だってそうだろう？産まれた時からずっと、と言っていていいほど一緒にいるのだ。

だってそうだろう？目の前で、愛しい大樹^{ひと}を奪われたんだ。

それでも、お前は俺の光だったんだ。

お前が、いつか起き上がったなら、俺は大樹なしでも生きていける気がしてた。

二人で、大樹のいない世界を生きていける気がしてた。

お前は俺の希望の光だったんだ。

でも、お前は眼を覚ます事はないだろう。

俺は、琉樹が眠りに落ちた理由がようやく分かった。

俺には分かるよ、琉樹。

お前は、大樹のいない世界で、俺と二人きりでいる事など出来ないだろう？

それは地獄ではないから。

大樹の願った通りに、俺とお前が結ばれたなら、お前の罪悪感は一先お前を苛むだろうから。

かといって、大樹の、神様のいる世界になどお前は行けやしない。お前をけして責める事のない神様の下へなど。

乱れる思考。揺らぐ視界。

どれほど、何も考えられないほどの感情の海を漂っていたんだろうか。

大樹。大樹。

少しずつ思考の乱れが収束し、整列され、先鋭される。

頭の中で乱舞していた言葉が、一つになる。

俺の、たった今崩れ落ちた世界の真ん中で、最後に残った言葉はやはり「大樹」という、俺の全てだった人の名前だった。

憎い。幸せにしたい。嫌い。癪に障る。尊敬する。会いたい。好き。見たくもない。嬉しい。寂しい。殺したい。一緒にいたい。殴りたい。一つになりたい。苦手。傍にいて欲しい。触って。見下す。

大樹が枯れたその後に……

壊したい。むかつく。抱きしめたい。苛めたい。甘やかしたい。独占したい。閉じ込めたい。

そして何よりも、

俺はお前が愛しくてたまらない

大樹。大樹。大樹。ああ。

俺はどうしたらいいだろう。

俺の世界からはもう、琉樹ひかりも、神様たいじゅも消えてしまったよ。

本当に俺一人なんだ。

大樹。ああ神様。

お前は俺にどうしろと言っただろう？

お前は俺に何を望むだろう？

いや、そんな事よりも。

俺はお前を幸福にしてやりたいよ。

お前が、犠牲になる道なんてもう要らない。

お前が、死んでからも我慢する必要なんて何一つない。

もう、いいんだ大樹。

そのために俺が出来る事は……

お前が泣いて嫌がっても。

お前が俺のした事に怒っても。

俺はそれでも、お前が幸福になるように動くよ。

ああ大樹。俺の神様。

大樹が枯れたその後に.....

.....
おとこ

第十三話：再開と別離

ひっそりとした真暗闇の中に、俺は窓から音も立てずに入った。この窓は立て付けが悪く、普通に鍵を閉めても何度か外から引張れば開いてしまうのだ。

俺はあの夜の夢で眠れない時、よく此処から病院の中へと侵入して、瑠樹の寝顔を見ていた。

例えば目を覚まさなくても、同じ想いでいる人がいるなら安心できた。

例えば目を覚まさなくても、同じ想い出を持つ人がいるなら行動できた。

けれどももう、「同じ」ではいられないのだ。

俺と瑠樹の大樹への想いは、全くの別物だった。

俺と瑠樹の想い出は、全く別のもので作り上げられていた。

俺だけが何も知らなかった。俺だけが狂おしい現実から守られていた。

暗闇の中にいるはずなのに、目の前は紅かった。

これは開かれ過ぎた瞳の、充血から来たものだろうか？

それとも精神的なものなのだろうか？

どちらにせよ俺は瞬きすら忘れ、黒猫のように眼だけを光らせ、瑠樹の病室へと入る。

眠る瑠樹。暗闇にまぎれて、ほとんど姿が見えないというのに、美しい。

眼の前に浮かんでくるのは瑠樹の記憶。

俺は今、何を見ているのだろうか。

かつての日常の残滓か？

それとも狂気の残滓か？

何も知らない。嗚呼。それはなんと罪深いことか。

大樹……瑠樹。

大樹が枯れたその後……

大樹が枯れたその後に……

人間という、美しく弱くそして醜い生き物。

嗚呼。俺は瑠樹に守られていたのだ。

瑠樹は意図すらしなかっただろう。

だが、俺は互いの思惑が入り混じった、発狂しそうな現実から紙一重で守られていたのだ。

何も知らされないという方法で。

俺の鈍さというヴェールによって。

でもそれももう終わった。

膜は破られた。

俺は選択をしなければ。

瑠樹の頬に触れる。

ひんやりとしているが暖かい。血の通う生きた人間の肌。

大樹の葬式の時も、俺はこうやって大樹の頬に触れた。

あんなに酷い事故だったのに、エンバーミング処置とやらを受けた彼の遺体はとても安らかだった。

とても綺麗だった。今まで俺が見てきた大樹の中で、一番綺麗だった。

頬に落ちる睫の影。

綺麗に紅く染まった唇。

大理石のような肌。

ひんやりとしていて、冷たい。血の通わない人間の肌。

嗚呼。

ただ血が通わないだけ。

ただ目が覚めないだけ。

それなら俺はこの眠り続ける大樹と一生、一緒にいても構わないと思った。

あの時に感じたのは、間違えようもない愛おしさ。

その死を疑ってしまう狂気。

けれど今感じているのは何だろうか？

この胸に滾る想いは何だろうか？

大樹が枯れたその後に……

俺は身を屈め、瑠樹の頬に口付けた。

あの時、大樹の頬に口付けたのと同じように。
そうすれば分かる気がした。

何が分かるかなんて分からない。ただ、何かが動く気がした。
唇に感じる感触の違い。これは微かに通う血のせいだろうか？

違う。これは大樹じゃない。俺はもっとリアルにあの時を、大樹
を思い出したい。

もっと、大樹を感じたい。

俺は伏せていた目を見開いた。

嗚呼。分かった。大樹が死に、瑠樹が眠ってからずっと、俺が思
っていた事はこれだ。

永遠にしたかった、俺の神様との別れ。あの時をもう一度。
もう一度、大樹に会いたい。

俺はナイフを振りかぶって瑠樹の胸を刺し、抉った。

ナイフに当たる肋骨の、ごつごつとした感触。

ああ。これが正に、瑠樹なのだ。

瑠樹という、人間の感触。

人間という、美しく弱くそして醜い生き物の感触。

頬が紅潮する。眩暈がするような高揚感。

俺は今、自ら神の元へと向かうことを許されなかった哀れな生き
物を、美しい大樹かみの元へと送っているのだ。天国へと導いているの
だ。

きっと、その天国につながる、その一瞬なら。

俺は大樹に会える。

俺は大樹を感じられる。

そう思いながら、俺は力任せに腕を捻りあげた。

吹き出る血。着ていたレインコートに返り血が、びしゃびしゃと

飛ぶ。

その瞬間、瑠樹が微かに目を開いた気がした。

俺が見たその眼は、とても安らかで、温かった。

大樹が枯れたその後に……

消えいく命の火が、眼に移ったかのように。

俺はそつと、瑠樹の頬に再度口付けた。

さつきとは違う感触。冷え切っていく頬の感触が、大樹のそれに近づいていく。

嗚呼。そうだ。今、此処には大樹がいるのだ。

俺は、あの時伝えられなかった言葉を口にした。

「大樹……愛しているよ。俺の神様……」

愛してる、愛していると繰り返しながら、俺は霞がかった頭の片隅で、瑠樹、と自分が呟き、その眼を見て涙を零しているのを感じた。

開け放した窓から吹く生暖かい風が、カーテンを静かに揺らしていた。

それは夏の訪れを告げる……

第十三話：再開と別離（後書き）

こんばんわ甲崎零火です。遅くなって申し訳ない。

この場面に関しては、細かい話をここではするのは控えます。

ただ此処まで来れたことを皆さんに感謝します。

次話で「大樹が枯れたその後……」は最終回となります。

最後までお付き合い頂けたら光栄です。

大樹が枯れたその後……

最終話：夜霧の帳越しに大樹は禍う。

部屋の中に、開け放しにした窓からの風が吹き込む。

生暖かい空気。つけたままのテレビの音。

「今日未明、ナイフ連続殺害事件の新たな被害者が見つかりました。

犠牲者はこれで7人にのぼります。現場は……」

そよぐカーテン。俺はただ深く想いを馳せる。

左手に、琉樹のネックレスを握り締めながら。

俺は、あの夏の始まりから、何事もなかったように生活を続けた。

大樹が枯れたその後に……

大樹が枯れたその後に……

琉樹の葬式は、盛大に行われた。

元々、かなり大きな交通事故の被害者であり、さらに今回殺人事件の被害者となった琉樹は、世間の興味の的となった。

週刊誌には「薄幸の美少女」「狙われた眠り姫」「報われなかった少年の祈り」などなど、かなり好き勝手に書かれていた。

もちろん、琉樹が眠りに囚われる前、合唱部の部長として、生徒会の会計として、クラスのアイドルとして、多くの人望を集めていた彼女の死を、膨大な参列者の誰もが悼み、嘆いた。

俺以外は。

俺は涙を流す参列者たちの中で、一緒に泣いた。誰よりも強く感情のこもった涙であったと思う。

だが違うのだ。俺の涙の意味は違うのだ。

俺の涙は、別離と、羨望。

長く、長く、長く長くずっと傍にあり続けた彼女の存在がなくなってしまうことは、俺にとっては身を切るような悲しい出来事だった。

だが、それに勝るとも劣らない、この激しい羨望。

だってそうだろう。彼女はこれから、神様のいる世界で幸福に暮らしていけるのだ。

それはなんとという幸福だろう。

琉樹は、彼女の罪をけして責めることのないであろう大樹に、何と言っただろうか。

大樹は、琉樹に何と言っただろうか。

俺には想像もつかないけれど、それでもその言葉が琉樹を救うのだ。

琉樹は大樹の下に存在あることが許されるのだ。

嗚呼。俺も、今すぐにも行きたい。今すぐにも大樹のいる世界で暮らしたい。

今すぐ大樹に会いたい。

けれど駄目なのだ。知らなかったとはいえ、何も気づかず、安穩と暮らしていた俺は罰を受けなければならぬ。

琉樹だって、罰は受けたのだ。繰り返し見る、自分の罪を映す過去の夢。

自らの罪を延々と映すその夢に、気も狂わんばかりだったろう。ともすると、俺の手によって死ぬその直前まで彼女は夢を見続けたのかもしれない。

だが俺はまだだ。俺はまだ罰を受けていない。償いをしなくてはならない。

考えた末に俺がしたのはとてもシンプルなことだった。

俺はまだ、楽園には行けない。

俺が行くのは、最後だ。

俺は楽園へと行ける幸福な人々を、その最も近くで見つめ続けるのだ。それが償いなのだ。

つまり。

多くの人を、幸福なる神様たいじゅの世界に。

俺が、楽園へと人を連れて行くのだ。

琉樹のように、罪に悩む人々を神様の下へ。

そうすることで、俺は許される。多くの人を幸福にすることで、俺の罰は贖われるだろう。

そう考えた俺は、この贖いの機会を待ち続けた。

普通に学校に通って。普通に勉強をして。普通に受験して。普通に上位の大学を目指して。普通に大学に入って。

そして機は熟した。

大樹が枯れたその後に……

俺は殺し、殺し、殺し、そして殺した。

そうして人を殺す度に、その人が幸福になれるのだと思えた。
自分の贖いが、少しずつ進んでいっているように思えた。
また一步、大樹に会う日が近づいていっているような気がした。
この手に残る強い血臭はいつだって俺の胸を悪くさせた。
けれども、それが人にとっての幸せなのだ。
この神様のいない世界にいるよりも。
死して楽園に向かうことは幸福なのだ。

大樹が枯れたその後に……

琉禍だ。

自分のしていることが正しいとは思わなかった。

どんなに言葉を取り繕ったとしても、人を殺していることには変わりない。

それを人に知られるわけにはいかない。

だが、俺には唯一、理解者がいた。

大樹が枯れたその後に……

日に日に大樹に顔形が似ていく琉禍。

俺をただ一途に慕う琉樹のような琉禍。

この大樹と琉樹の生き写しの姿を前に俺は、琉禍なしでは生きてはいけなくなっていた。

人を殺し、死者の周囲の人々への罪悪感と善行をしているのだという確信の狭間で不安定になった時。

琉禍の姿を見ることで落ち着いた。

俺は目的を見失わずにいられた。

けれど、最初の内。

俺は知られなくなかった。

この、純粹に俺を慕う少年、いや最早、青年である彼に。大樹と琉樹に似る、この青年にはなく。

俺の大事な幼馴染の琉禍にだけは。

俺が殺人者であることを知られなくなかった

けれどそれでも、世界は俺がそうあることを許さない。

大樹が枯れたその後に……

俺は、神様たじろのために動かなくてはならないから。

「ねえ、樹さん」

いつものように、琉禍と食事を共にした時。

「俺が死ぬ時は、樹さんが先に殺してくださいね？」

酔った勢いみたいに、眼だけは感情と想いを込め、琉禍はそう言った。

俺は一瞬、何を言われたのかわからなかった。

いや、わかったけれど、その言葉が意味することを認めたくなかった。

「……琉禍、お前……」

「樹さん。俺、知ってるんですよ。ずっと、知ってたんですよ。でも、俺はそれでも貴方が好きなんですよ」

必死に言い募る琉禍。

琉禍が知っていたことを、それでも俺を好きでいてくれることを喜ぶ感情と。

この青年に全てを知られてしまっていたのだと、ただの優しいお兄さんではいられなかったことを嘆く感情と。

その二つが、心の中で暴れた。……胸が、心臓が、痛い。痛い。

「……俺がもし、琉禍を好きになっていたら、今頃どんな風になってたかな」

……そうすれば、何も起きなかったのだろうか。

そうすれば、今も大樹と琉樹はこの場所にいたのだろうか。

「……そんな、ありえない事を」

掠れた琉禍の声。俺は自分の言っている言葉が、如何にこの青年

大樹が枯れたその後に……

にとって残酷な言葉か思い知らされる。

それでも、言葉はとまらない。

「うん、分かってる。でも、そうだったなら、幸福になれたかな。

俺は普通に会社員していたかな」

俺は、この世界で幸福になれたかな。

大樹は、神様じゃなくただの人間で俺の隣にいたのかな。

「……ごめんな。琉禍」

「……それは、貴方のしている事についてですか。それとも俺を好きになってはくれないという意味ですか」

琉禍の瞳が不安げに揺れる。何の不安だろう。

琉禍にとって絶対的な存在である俺の、謝罪への不安だろうか。

……俺という存在への不安だろうか。

俺はその、男にしては細い肩をそつと抱き寄せた。

「……俺は自分のしている事を正当化するつもりはないけど、悪い事をしていないとは思ってない。俺が謝ったのは、俺は未だに大樹を忘れていないのに、それでも琉禍に想われていたくて、ふっつてあげられない事」

……なんて。

嘘ばかり。

琉禍は喉から絞り出すように声を出した。

「……貴方、勝手ですね」

「……すまん」

嘘しかつけない俺で。

大樹は俺の神様だ。忘れるとか、そんな存在じゃない。

俺が謝ったのは、俺が昔、琉禍を、琉樹の付属品としか見ていなかったことについてだ。

今ではこんなにも、俺にとって大きな存在だというのに……

「……樹さん。貴方が死にたくなったら、俺が殺してあげますよ」

……琉禍？

「だから、貴方が死ぬまで、俺が死ぬまでそばにいさせて下さい。

何でもします」

涙。琉禍が泣いている。

……俺は、いつもこの子を泣かせてばかりだ。帰りたくないと言くと泣く幼い琉禍。

それが、今の琉禍に重なって見える。

「殺してあげます」

いつの間に、こんなに大きくなったのだろう。

俺を殴りにきた時のあの表情。

俺に日記帳を渡した時の表情。

過去のどれとも違う、現在の琉禍がいる。

何処にもいけない、俺とは違って、

「……ごめんな。琉禍」

「樹さん……」

「お前とならいい気がする。お前に殺されるなら、許される気がする」

大樹に似た琉禍、ではなく。

琉禍に似た琉禍、でもなく。

ただ純粹に俺を慕う、幼馴染の琉禍だから。

きつと、お前だからこそ、俺の罪を途切れさせることが出来る。

「樹さ、」

だから俺は言った。

「だから、いつかに俺と死んでください」

大樹が枯れたその後に……

そしてこのことが、俺をいつそう大胆にさせた。
俺を肯定する存在は、俺を強く、無謀にさせた。
俺が思うのは唯一つ。

大樹に会いたい。

お前を幸福にしてやりたい。

……そうであると、信じていなければ、足場全てが崩れ去るよう
な気がした。

そして今日。

俺は琉禍を迎えに行く。

部屋の中に、開け放しにした窓からの風が吹き込む。
生暖かい空気。つけたままのテレビの音。
「今日未明、ナイフ連続殺害事件の新たな被害者が見つかりました。
犠牲者はこれで27人にのぼります。現場は……」
そよぐカーテン。机の上に転がる。薄紫の石。
もう誰も戻らない。
もう、誰も……

大樹が枯れたその後に……

最終話：夜霧の帳越しに大樹は禍う。（後書き）

お久しぶりです。甲崎零火です。

この話をもちまして「大樹が枯れたその後に……」は完結とさせて頂きます。

この話の枠組みを作ったのはまだ小学生の時でした。

今、大学生になってこうして一つの物語として形作ることができ、本当に幸運に思います。

当初のハッピーエンドを、このような形にしたことに後悔はありませんが、それでも、本当は登場人物たちに幸福な人生をあげたかったようにも思います。

このような、筋書きもしっかりしていなかった話に、今までお付き合い頂いて本当にありがとうございました。

完結記念として、もう少ししたら番外編の方に短編をアップします。それで「大樹が枯れたその後に……」は終幕とさせて頂きます。

連載当初からお付き合いいただいた方、途中で評価を下さったSSG様、そして最後まで読んでくださった方、皆様に感謝させて頂きます。

ありがとうございます。

失礼します。

甲崎零火

大樹が枯れたその後に.....

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7472b/>

大樹が枯れたその後に.....

2008年8月29日19時11分発行